

聖 書：マルコの福音書 9：14～29

説教題：祈りによらなければ

日 時：2025年12月14日（朝拝）

前回読んだ9章最初の箇所で、イエス様は高い山の上で栄光の姿に輝かれました。しかし、その山から下りて来られると、すぐにこの世の現実に直面されます。イエス様と3人の弟子が戻ると、そこには大勢の群衆が集まり、他の弟子たちを囲んでいました。さらに律法学者たちもいて論じ合っていました。何か問題が起こっていることは明らかでした。この後の記述から分かることは、そこにいた弟子たちが悪霊につかれた子どもから悪霊を追い出すことができずにいたということです。弟子たちは先にイエス様から悪霊を追い出す権威を与えられていました。そのことが6章7節に記され、続く13節では、彼らが実際に多くの悪霊を追い出したと記されていました。そこで弟子たちは、悪霊を追い出してほしいとの願いを受け、以前と同じように行ってみたのでしょう。ところが今回はうまく行かなかった。悪霊は出て行きません。その子の父親は当然失望したことでしょう。そこに律法学者たちが付け込むようにして弟子たちを責め立て、様々なことを言い始めたのだと思われます。こうしてその場には議論が起きました。弟子たちは恥じ入り、困惑しながら、あるいは自己弁護していたかもしれません。いずれにせよ、そこには穏やかではない緊張した空気が漂っていたのです。

イエス様がその場に来られると、群衆は「非常に驚き、駆け寄って来てあいさつをした」とあります。思いがけないタイミングでイエス様に出会い、興奮したのでしょうか。人々はイエス様を取り囲みます。そこでイエス様は尋ねました。「あなたがたは弟子たちと何を論じ合っているのですか。」この問いに答えたのは、口をきけなくする霊につかれた子の父でした。彼は説明します。その霊は息子にとりつくと激しい力を発揮し、ところかまわず子どもを倒します。そのため、息子は泡を吹き、歯ぎしりをし、からだをこわばらせてしまいます。それでお弟子たちに霊を追い出してくださいとお願いしたのですが、できませんでしたと。弟子たちにとってはまさに面目丸つぶれでした。イエス様はこれを聞いて、19節で言われます。「ああ、不信仰な時代だ。いつまで、わたしはあなたがたと一緒にいなければならないのか。いつまで、あなたがたに我慢しなければならないのか。」ここで「不信仰な時代」として責められているのは誰でしょうか。おそらくこの場にいた全員です。弟子たちもそうですし、この

後で不信仰が明らかにされる子どもの父親もそうでしょう。また、議論ばかりして混乱を大きくしていた律法学者たち、また群衆も含まれるでしょう。このあと見るように信仰があればもっと違った状況がここにあったはずです。しかし不信仰のゆえに、ここにあったのは嘆きと苦しみ、混乱と議論だけでした。そのような中でイエス様は言われます。「その子をわたしのところに連れて来なさい。」このイエス様によって、ここから新しい展開が始まることになります。

その子がイエス様のもとに連れて来られると、靈がすぐ彼に引きつけを起こさせたので、彼は地面に倒れ、泡を吹きながら転げ回りました。その様子を前にしてイエス様は尋ねられました。「いつからこうなのですか。」父親は答えます。「幼い時からです。靈は息子を殺そうとして、何度も火の中や水の中に投げ込みました。」そして彼は続けました。「しかし、おできになるなら、私たちをあわれんでお助けください。」ここに、この父親の不信仰が表れています。イエス様はその言葉を取り上げて、こう言われました。「できるなら、と言うのですか。信じる者には、どんなことでもできるのです。」これはどういう意味なのでしょうか。「できるなら、と言うのですか」という言葉によって、イエス様はこの父親が神の能力を問題にしていることを問題にされました。確かに彼は22節で「おできになるなら」と言いました。おできになるかどうか分からぬが、もしおきになるなら、助けてください!と。これに対してイエス様は問題は神の側にあるのではないと言われたのです。問題があるのは、むしろ彼の信仰の方です。「信じる者には、どんなことでもできるのです」という言葉は、そのように彼の信仰を問う言葉です。彼が信じていないこと、それが問題なのです。不信仰が神の働きをブロックしているのです。前にイエス様の郷里ナザレの人々が不信仰だったため、イエス様はそこでは何も力あるわざを行うことができなかつたと記されていました。不信仰は神のわざを妨げます。ですから問題は神の力や能力ではありません。神には、どんなこともおきになります。ただ、その神の恵みにあずかるためには信じることが求められます。その信仰へと招くために、イエス様は「信じる者には、どんなことでもできるのです」と言われたのです。

この言葉は、この部分だけ切り取って語ると誤解されやすい言葉でもあります。時々「信じる者には何でもできる」という格言のように用いられ、自分を信じること、自分の可能性を前向きに信じ続けることが驚くべき結果を生むという意味で語られることがあります。しかし、もちろんそれとは全く異なります。ここで問われている

のは自分への信頼ではなく、神への信仰です。

また神への信仰と言っても、自分が信じることが何でも思い通りに実現するという意味ではありません。神を信じて「こうなるはずだ」と思い込めば、その通りになるのではありません。言うまでなく、すべての決定権が私たちにあるわけではありません。私たちが神に命令したり、指図できるわけではありません。大切なのは神が最善とお考えになる御心がなることです。

このイエス様の言葉のポイントは、私たちの側で神の力に制限を設けてしまわないということです。「神にもこれはできないだろう」「これはさすがに無理だろう」と私たちが制限を設けてしまうなら、その不信仰が神の働きを妨げます。しかし、制限を設けず神に信頼するなら、私たちの前には全能の神によって無限の世界が開かれているのです。神に信頼する者の前には、あらゆる可能性が開かれています。ですから私たちは信仰の扉を自分から閉ざしてしまるべきではないのです。どんなことでもおできになる神を見上げて信頼し、その神が御心とされる最も良いものが自分に与えられることを期待して祈るべきなのです。

さて、このイエス様の言葉を聞いて、その子の父親はどうしたでしょうか。24節に「するとすぐに、その子の父親は叫んで言った」とあります。彼はまず「信じます」と言います。これは彼の決意の表明です。今語られたイエス様による信仰への招きに対する応答です。そして彼は続けて「不信仰な私をお助けてください」と言いました。一見すると矛盾した言葉のようにも聞こえます。「信じます」と言いつつ、「私は不信仰です」と言っている。一体どっちなのか?とも思います。しかしこれは矛盾ではありません。彼は信じたいのです。信じる道を進みたいのです。しかし現実の自分を見つめると、イエス様に指摘された通り、自分は不信仰な者です。そのことをごまかさずに認め、「そんな私を助けてください」と彼は叫んだのです。実にこのように祈って良いということがここで示されています。そして実はこれが信仰の祈りなのです。彼は、自分には何も誇れるものがないと言っています。自分は不十分で神の前に何かを主張できる者ではない。そのことを認めながら、ただ神の恵みにより頼んでいます。これが聖書が良しとする信仰なのです。彼は自分の立派さに信頼していません。讃められる点があるとは思っていません。しかし、それでも神はこのような自分を憐れんでくださるということを見つめて、神を信頼し、信仰の道を進もうとしています。神

に近づき、神にすがりついています。それで良いのです。

この父親の祈りは、これまで多くの人を励まして来た言葉です。もし立派な信仰でなければ神に受け入れられないとしたら誰が祈ることができるでしょう。いつになつたらそのような信仰を持てるでしょう。しかし私たちは不信仰である現実の自分をそのまま認めて良いのです。そのことを悲しみ、悔い改めながら、しかし同時にこんな自分をも神は憐み、助けてくださると信じて、へりくだって神に願い出る時、神に向かって開かれたその信仰を通して、どんなことでもおできになる神が豊かに恵みを注いでくださるのであります。今日の場面でも、この彼の信仰を通して神のみわざが行われます。イエス様が靈を叱りつけると、靈は叫び声をあげ、その子を激しく引きつけさせて出て行きました。するとその子が死んだようになつたので、多くの人々は「この子は死んでしまった」と言いました。しかし、イエス様が手を取って起こされると、その子は立ち上りました。信仰を通して「どんなことでもできる」という神のみわざが確かにここでも示されたのです。人間の考えをはるかに超える、神の恵みに満ちたみわざが行われたのです。

さて、最後の 28~29 節には、家に入った後の弟子たちとイエス様との会話が記されています。弟子たちはそっとイエス様に尋ねました。「私たちが靈を追い出せなかつたのは、なぜですか。」 彼らは相当ショックだったのでしょう。以前はできたはずなのに、なぜ今回はできなかつたのか。これに対してイエス様は 29 節で言されました。「この種のものは、祈りによらなければ、何によても追い出すことができません。」 まず「この種のもの」という部分について述べておきたいと思います。一見すると今回の悪靈は特別に強力な種類の悪靈であり、そういう場合には特別な祈りが必要だと言っているように読めます。そして逆に言えば、そうでない場合には、そこまでの祈りは必要ないと言っているように聞こえます。しかしそうだとすると少しおかしいことになりますよね。悪靈に階級の違いを設けて、それによって祈りの仕方を変えなければならないということになるからです。マルコの福音書の注解で高く評価されている学者たちは、ここで言う「この種のもの」とは、特定の種類の悪靈と言うよりも、悪靈との戦いに代表される靈的な戦い全般を指すと理解しています。こうした靈的な戦いに対しては人間の力だけではどうにもならない。だからこそ祈りを通して神により頼むことが欠かせないということです。

では、この祈りとは何でしょうか。これは特別な祈りのことなのでしょうか。もしかすると欄外の注に記されているように、このイエス様の言葉を「祈りと断食によらなければ」というフレーズで覚えている方もおられるかもしれません。そこから、特別な悪霊との戦いには断食などの特別な対処が必要だと考えられることがあります。しかしこれは本文としては正しくないと今日では認識されています。そしてここで改めて注目すべきは、イエス様は悪霊を追い出す前に特別な祈りはささげていないということです。何か魔法のような祈りの言葉を唱えてはいません。つまり、ここで言われている祈りとは、悪霊の追い出し直前の特別な祈りではなく、普段からの祈り、父なる神との親密で継続的な交わりのことだと考えられます。マルコの福音書ではイエス様の祈りはそれほど強調されていませんが、それでも1章35節や6章46節にはイエス様が一人で祈りに打ち込んでおられた様子が記されていました。それに対して今日の出来事は、弟子たちには神に真により頼む祈りの生活が欠けていたことを明らかにしていると言えるでしょう。弟子たちは確かに以前は悪霊を追い出すことができました。すでに触れた通り、6章7節、13節にそのことが記されていました。だから今回も同じようにできると彼らは思っていたのでしょう。ところが、できなかつた。そんな弟子たちにイエス様は改めて祈りの重要性を教えられたのです。

私たちはここから「以前の信仰で今日を生きることはできない」ということを学びます。弟子たちは過去には悪霊の追い出しができたのに、今日の箇所ではできませんでした。つまり過去にできたから今日もできるということにはならないということです。過去の信仰の惰性で今日を生きることはできない。今日直面する課題のためには今日の信仰と祈りが必要です。その都度、新しく神に信頼し、恵みを祈り求めることが必要です。もちろん、そこには信仰の成長があるはずです。しかし私たちの成長とは、成長して神に祈らなくなる、神により頼まなくとも生きて行けるようになるということではありません。むしろ私たちの成長とは、経験を通して学び、一層神により頼むようになる、つまり一層祈るようになるということに現れるべきでしょう。そのようにしてこそ、神がキリストにおいてもたらしている神の国の祝福に私たちは豊かに生きることができるのです。

今日の箇所には栄光の山から下りて来たところにあるこの世の現実が描かれていました。私たちも似たような状況にあるでしょうか。以前、体験したはずの靈的祝福を今日は体験できない。対処できると思ったことも思うようには対処できず、皆で暗

い表情をしている。そこには苦しみや嘆きが満ち、人間的な議論ばかりが目立つけれども、祝福が見えない。失意や落胆、困惑や恥がむしろ広がっている——そんな山の下の世界です。そのような場所へ来られたイエス様は示されました。神を見上げるなら、そこに神の国の祝福は豊かに開かれていると。「信じる者には、どんなことでもできるのです」と。問題は神にあるのではなく、私たちの信仰の側にあるとイエス様は指摘されました。このイエス様の言葉に導かれて、私たちも改めて祈りを通して神により頼む歩みへと招かれています。神により頼んでいることを、祈りにおいて日々現す者とされたいと思います。神を信じる信仰において弱さを覚える私たちです。しかし、「不信仰な私を助けてください！」と祈って良いのだとこの箇所は教えてくれています。そしてその祈りで良いなら、誰でも始めることができるのではないかでしょうか。自分の不足や不十分さを告白しながら神に祈って良いのです。イエス様は、からし種ほどの信仰があれば良いと言われました。その小さな信仰を通して神が働かれます。自分の力により頼むのではなく、主に望みを置いていることを日々の祈りの取り組みにおいて現し、新しい恵みに生かされる者でありたいと思います。昨日までの信仰や祝福で今日を生きるのではなく、今日また主に祈りをもってより頼み、新しい恵みをいただく者でありますように。そうして「信じる者にはどんなことでも可能である」と約束されている神の国の祝福の中に豊かに生かされる者とされて行きたいと思います。